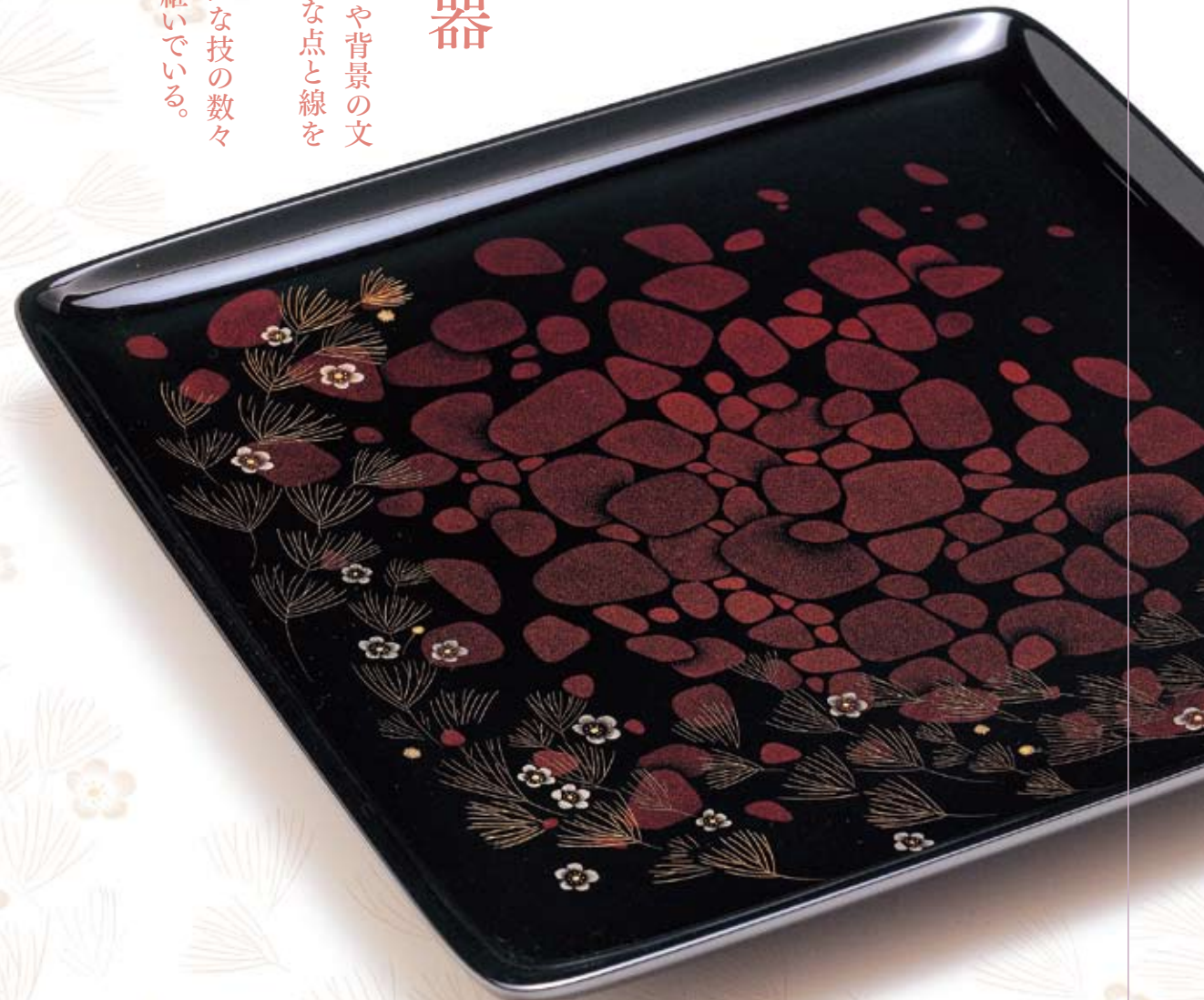


## 伝統と自由の漆器

小さな花の花びらや背景の文様の立体感は、微細な点と線を彫って描いたもの。  
日本伝統の細やかな技の数々を、若き職人が受け継いでいる。



▲ 椀と箸



▲ 沈金象嵌盤「梅花藻」(2012年)

◎ 表紙：乾漆造（かんしつづくり）による菓子器です。春から初夏をイメージして背景に白漆を塗り、沈金と沈黒の技法でキウイの花を描きました。

CHIZURU KON

漆工芸作家

金千鶴さん

秋田市仁井田新田1-10-18  
TEL.090-2022-3376E-mail  
chokaifusuma615@ac.auone-net.jp

漆黒に浮かぶ赤い文様は、目に見えないほどの小さな点の集合体。かれんな白い花は清流の水草、梅花藻。昨年、東日本伝統工芸展で初入選した沈金象嵌盤「梅花藻」は水草が川の流れに揺らめくさまを描いた作品。夏の清流に漂う澄んだ空気や水の透明感を表現した。

漆の塗面に文様を彫り、漆を擦り込んで金箔や金粉、顔料などを入れる「沈金」。彫った部分に数回色漆を塗り、研ぎ出して文様に奥行きを出す「沈金象嵌」。これら輪島塗の伝統技法を用いて、金さんは独自の世界を描く。「景色の中で感じた空気や季節感、情景を表現したい。漆器を通して、見る人と「空気感」を共有できたら」

秋田公立美術工芸短大卒業後、沈金の技法を習得しようと石川県輪島市へ。漆芸の職人を育成する石川県立輪島漆芸技術研修所で基礎から学び、沈金、髹漆の専門科を卒業。4年前に地元秋田市に戻った。輪島で過ごした期間は丸8年。職人の世界はもちろん甘くはなかったが、当初から抱いていた「趣味ではなく、これで生きていく」という覚悟は揺るがなかった。

「伝統工芸の職人が減りつつある今、私たち世代が守らなければ技術は簡単に廃れてしまう。伝統の技を守り伝えるのが自分の使命」

いつも製図は自ら引く。下地となる木地づくりは石川県に出向いて木地師に直接依頼。それから塗りと加飾を施し、作品が完成するまで約1年。文様のモチーフは野の草花が多く、輪島塗では珍しい。「伝統の技を守りつつ、表現は自分流」が金さんのスタイル。自由であることで「漆の表現の豊かさ、魅力を若い世代や子供たちに伝えたい」と話す。

※髹漆：漆をへらやハケで素地に塗るし。



▲ カラスエンドウを描いた小箱